

「二」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

私は町の自転車屋というものがいまだに一軒^{けん}として店をたたまず、それどころか大いにはんじょうしているらしいのが不思議でなかった。色とりどりの正札のついた最新型の自転車^が彼^{かれ}らのショーウィンドウにずらりと並んでいるのを横目で見ながら、私はあんな物を売りつけられないでも済む方法をみつけたつもりでいた。その方法によれば、私の家では向こう十年でも二十年でも一台の自転車も購入^{こう}せずに済ませられるはずであった。というのも――よその土地のことは知らず――私が住んでいるこの海辺の町では、いまだ十分使用にたえる自転車^をを道ばたに遺棄^きすることがはやりだしていたからである。

この地区の「粗大^そゴミ」集合所に指定されている近所の原っぱに行くと、自転車ならスクラップ並みの古いのからほとんど新品同様のまで、大人用^{おとな}から小児用^こまで、あらゆるタイプとサイズの自転車が何台も捨ててあった。同じ土地の住民である私はその果かな捨てっぷりに一驚^{きょう}し、このように急激に、集団的に自転車^がが不用になる場合について思いめぐらさざるを得なかった。念願^{まゐ}の自家用車^{かい}に取って代わられたのか、引っこしの荷やっかいになるので処分して行ったのか、それとも新しい自転車^にに買いかえたのか。それにしてもはだるくに買った形せきもない新品がまじっているのはどういうわけか。^{〔注1〕}贓品^{ぞう}のたぐいであろうか。しかもこの町のバイシクル・ライダーの数は、年々増えこそすれ少しも減っているようには見受けられない。どうやらこの界わいには、私などの見当もつかぬ金持が多いのか、それとも物を粗末にする人間がかたまって住んでいるとしか思えなかった。

自転車だけではなかった。ふつう一ぱんの家庭で日常使われる家具調度の品目はすべてそこに数え上げることができそうだった。なべかまからはじめて冷蔵庫にガスレンジに流し台、風呂おけにたらいに洗たく機、食堂用のいすとテーブル、応接間のソファのセット、さらには柱時計、テレビ、鏡台、スーツケースの類まで一通りそろっていた。吸入器、かつら、仏だん、ワニのはく製といったようなものさえあった。つまり、大ざっぱに言って、

グランドピアノ以外の物は何であれそこで——手に入れたければ——手に入れることができるのであった。なるほどそれらの品物は、元来人間どもがいわゆる人間らしい文化生活を営むために必要にせまられてやむにやまれず発明したものにはちがいがなかった。だがこうやって用済みになって一個ずつむざんに白日の下にさらされているのを目にすると、そのグロテスクさは思いの外で、まるで自分の腹からぞうもつをつかみ出して見せつけられたようなぐあいだった。なんとまあ、われわれはたくさんのお汚物を自分の体内に後生大事にかかえこんでいるとか！

しかし、その程度の光景にいちいちびっくりしていたのでは、時代おくれの人間と言われても仕方なかった。もっと海のほうへ行くと、物品ばかりか、生き物もさかんにすてられていたのである。海沿いの防砂林の松林では、マルチーズやコッカー・スパニエルが何匹も寒空にさまよっていた。ぬいぐるみかしら？　そう思って近づくと、正真正味の生きている犬なのであった。それが飢えこごえて、かれ草をしとねにふるえながらうずくまっているので、遠目にはよく出来たぬいぐるみにも見えるのだった。もっとも、彼らを遺棄したのは土地の人間ではなく——この住人ならとなりの県へ、箱根か伊豆のほうへでも捨てて行くはずだ——東京からはるばる一時間ドライブしてきた主人の手で、それとも知らずに冬空の下に置き去りにされたわけである。

どうしてまたそのような憂き目を見ることになったのか。それというのも、近ごろの愛犬家にはおそろしく移り気な連中が多く、一種類の犬をしばらく飼うとたちまちあきがきて別の種類のが欲しくなる。それで何万も出して手に入れた犬おしげもなく車の窓から捨ててしまわうしかった。あきる理由はいろいろあった。流行につられて飼ってはみたものの、毎日の世話が思いのほか面倒だったり、大きくならないペットのつもりで買ったのにどんどん肥大するので当てが外れたりして、じゃまになる。それにまた、アクセサリーとしての畜犬は、そのけものの色やらムードがマンションのインテリアにマッチしないという率直明快な理由からも処分される。

そんなわけで、この海辺の町ではあわれな野ら犬といえはむしろ血統書付きの高級舶来犬ばかりで、むさくるしい雑犬のほうがかえって大事にされているくらいなのである。

四つ足でさまよい歩く「粗大ゴミ」のむれ！　この残にんで無表情な呼び名を前にして不吉な戦りつをおぼえない者がいるだろうか。まだ使える自転車どころか、生きている犬だっていとも簡単に「粗大ゴミ」にされてしまうのだから、そのうちには人間もなんらかの方法で残留組と「粗大ゴミ」の組とに仕分けされて、定期的につ焼きやく炉の中で処理されてしまうようにならないものでもなかった。しかもその風潮たるや、よくよく考えてみれば、なにも今はじまったことではない。おぼ捨ても、^{〔注3〕} 嬰兒殺しも、^{〔注4〕} アウシュヴィッツも、ヒロシマも、悪魔が人間という名の「粗大ゴミ」の始末に困りぬいて発明した能率的な処理法ではなかったか。

それはともかく、ここ数日また例の原っぱの一角に「粗大ゴミ」が「集合」しつつあった。二た月か三月に——^{〔注5〕} ぺん市役所から回収日が告示されると、その一週間ぐらい前から目を追って家具調度の山がぎざかれて行く。見ていると遠くからわざわざ小型トラックでステレオセットや洋服ダンスを捨てにくる人もいて、ちょっと見ると嫁入り支たくでもはじめたのかと思うようだった。面白いことには、大きな品物を捨てにくる連中ほど陽気で活気にあふれていて、この情熱的なすてっぷりを見よと言わんばかりに手あらくがらくたのただ中に投げこむのだった。彼らの気はくにしりごみしながらも散歩がてらにそれとなく近づいてみて、私はいささか気を悪くしてしまうこともあった。それらの「粗大ゴミ」が私の家で珍重しているミゼラブルな家具類よりもはるかに立派であることが多いからであった。

とはいえもちろん私はそれらの物に指一本ふれるべきではなかった。私は足元にかけている銀ピカの真新しいようなトースターをさもばかにしたようにくつのつま先でけったりした。また、ほこりをかぶってはいるが最新型とおぼしいミシンやトランジスタ・ラジオも思いきりけとばしてやった。だがそのくせ頭のすみでは、これ

ならまだ使えるじゃないかと、この程度ならちょっと修ぜんすればまだ何年も動くだろうにとか、そんなことに未練がましくこだわっているのだった。私は物をすてるという行為（注5）に対する自分の小心翼翼たる心理が度しがたいものと思われた。自分自身ふだん特に物を大事にしているわけでもないのに、いざ他人があんまり見事に物品をとうじんするのを目撃（注6）すると、見当外れな反省心をかきたてられる。それは私が戦争中の物資欠乏の時代に、いやというほど節儉貯蓄（けけんちく）の精神をふきこまれたあわれむべき「昭和一桁（けだ）」生まれの人間だからか。それに私はきょうは小さな息子（むす）を連れてもいた。子供の手前も父親が道ばたに落ちている品物を拾い上げて点検したりするのは好ましくなかった。

そんなふうに好奇心をおしくして、色さいゆたかな「粗大ゴミ」の山を問八 ㊤ あおぎ見ながら、私がひそかに探しているものがないでもなかった。それは——子供用の自転車だった。私の家では上の二人に一台ずつ、いずれは下のも仲間に入ることだから都合三台の小型自転車を常時確保しておかなくてはならなかったのである。

小学生の息子たちが欲しがっていたのは、五段変速のややこしい切りかえギアを装備し、ハンドルの前にバスケット、サドルの下にあやしげな弁当箱のような物入れを取り付けた今流行のサイクリング・ツアー車だった。そのバスケットにグローヴを投げ入れて野球の練習にかけつけるのが、この辺の小学生のカッコいいスタイルとされているようだった。ところが私も妻もそのキザな乗り物に好感を持っていなかった。第一に、それは値段が高すぎる。第二に、じきに背たけがのびてサイズが合わなくなるのがわかっているのに、そんなおもちゃめいた自転車はくだらないぜいたく品である。第三に、みんなが乗っているからといって人のまねをすることはない。要するに私は、その種の高価な自転車を息子に買ってやるつもりは毛頭なかったのである。

その代わり、私はまず長男に町の自転車屋で中古の子供用自転車を五千元で買いあたえて、しばらくはそれですまんさせることにした。今なら私は大分目が肥えているからだまされないが、当時はいい買い物をしたぐらい

に思っていた。中古とはいえ、とにかく全身銀色に美しく光っていたからである——早い話が、それは例の「粗大ゴミ」の一種に銀ペンキをぬりたくり、ところどころに油をさすなどして一時的に走行するようにしただけのしるものであったのだが。それが証こには、その自転車はある日とつ然音もなくこわれてしまっていた。というより、あるしゅん間からの前の車輪がてこでも動かなくなったのだった。しかし今度は私はもう自転車屋に相談に行く気はなかった——こうしてまっすぐ原っぱへやってきたほうがよほど手っ取り早かった。

問九 見たところ、きょうは空き地の道路側には何台かのさびた大人の自転車しか見当たらなかった。私はわきへ回って鉄条もうをくぐりぬけ、廃品（はい）の山の裏手へとふみこんだ。子供は道のはしに立って心配顔に私に呼びかけ、そんなところへ行かないほうがいいという意味のことをさげんでいた。冬でもヘビが出ると思っているのだ。夏、私はこの草はらでめずらしく青いトウセミトンボを見かけて教えてやったりしたが、子供はその時もとえずヘビの不意の出現を驚かしている風だった。私は、ヘビはいまごろはねむっているからだいじょうぶだと言いながら、あたりを物色していた。そしてその冬がれた草むらの中に、私はヘビではなしに、まだかなり新しい子供用の——白いバスケットまで付いた——自転車が一台ひっくり返っているのを発見していた。だが私はべつにあわてもさわぎもしなかった。手をふれようとしなかった。真っ昼間、人通りも少なくないこんなところでわが子の自転車を調達しているのを近所の口うるさい主婦たちに見とがめられては面白くない——日が落ちてから取りにきたほうがいい。私は足元に横だおしになって冷たく光っている品物をしきりに値ぶみして、それがいつか五千元で売りつけられた「粗大ゴミ」よりはるかに上等なものだと判断せざるを得なかった。私はその場は遠目に目星をつけるだけでおとなしく引きかえた。

問十 三歳（さい）の息子の手を引いて通りを歩きながら、私はこの子にも当分の間はあの自転車で練習させて、じょうずになったら新しいのを買ってやればいいと言い訳がましく考えていた。どこのだれかわからない——ひょっとした

らすぐ近くに住んでいるのかもしれない——よその子供のお古^{ふる}をわが子に使わせるのは、父親としてはなはだ心痛むことだが、ぬすんだ品物ではないのだからはじる必要もなかった。にもかかわらず私はどこからともなく、自転車泥棒^{どろぼう}！ という声が聞こえてくるように思うのだった。なぜそんなことがいまごろ急に気になりだしたかという、それにはたわいのない理由があった——二十年以上も昔に私はそんな題名の忘れがたいイタリア映画を見たことがあったのである。

問十一A

問十一B

もっとも、あの映画の自転車は今日私がうるさくせがまれているような子供の自転車ではなかった。まだ自転車が「粗大ゴミ」に成り下がっていなかった戦争直後の混乱の時代に、一台の古自転車をぬすまれたがために父と子が悲しい一日を過ごす破目になる話だった。すてるところか、古自転車が立派に質に入った時代の話だった。長いこと失業していた父親がやっとビラはりの仕事にありついて、妻のシャツと入れかえに自転車を質屋から出す。そして幼い息子をつれて勇躍^{ゆうやく}ビラはりに出かける——そんなふうに映画は始まっていたようである。だが主人公はビラをはっているすきにその自転車をぬすまれてしまう。警察に届けるが相手にされない。古自転車の市場にも行ってみる。血眼になって探しているうちに自分の自転車に乗った男をみつけるが、にげられてしまう。父親はいらいらして子供に当たりちらすが、子供はつかれと空腹でしゃがんだぎり動かない。(情けないことに、あれほど感動した私もはや断片的なシーンのいくつかしか覚えていない。白状すると私はこの筋書きも古い映画事典をたよりにたどっているのである。) 父親はすねる子供を放って歩いて行くが、そのうちに背後で子供が河に落ちたというさわぎを耳にしてあわててかけつける。だが息子ではなかった！ 父は子がいとおしくなり、レストランに入ってわずかの金で料理を食わせ、自分も一杯^{ぱい}の酒にいい気持になる。だがとなりのテーブルではわが子と同じ位の年れいの金持の子供が両親に囲まれてごうかな食事を楽しんでいる。軽いさい布、家で待っている妻のこと、明日からの仕事のこと——たちまち父親の酔い^よはさめてしまう。そうしてこの父親は、苦しい一

日の終わりにフットボール競技場でとうとう人の自転車をかっぱらい、子供の見ている前でとらえられる。ラストシーンは、情状しゃく量のすえしゃく放された父親が子供の手を引いて男泣きに泣きながら夕暮れの人ごみに消えて行くところで終わっていたように思う。

問十二A

私はなんだかひどく身につまされて、見終わったあとその主人公の父親のように泣きぬれていた。すべてがいこないだまでの私の身の上のようであった。戦争から帰ってきた私の父は、ビラはりこそしなかったが、自転車こそぬすまなかったが、食べる苦勞にやせおとろえていたのは似たようなものだった。それにひきかえ今の私は——あの映画のうらぶれた父親に遠くおよばない。

問十二B

⑧

において、

死んだ自分の父親にすらおよばない。私はせいぜい子供の自転車を調達すべく「粗大ゴミ」の山におそるおそる分け入ったりするぐらいが関の山だった。私の子供らもまたしかりだった。彼らはあの映画の少年のように、かつての私のように、ボロをまとっているわけでも腹をすかしているわけでもなかった。幼い息子は、目の前を消防自動車を通り過ぎると、大きくなったらあれを買ってほしいなどと言うのだった。また市役所のし尿処理車^{しにょうしりしや}が通るかかると、あれもいつか買ってほしいなどとせがむのだった。食いふくれて満足を知らない子供たち！

そんなわけで同じ自転車に寄せる感懐^{かんわい}も、私の場合は子供たちとちがって骨身にしむ貧ぼうとこ独のにおいにするものばかりだった。そして自転車をすてるといえば、その昔やはり二十年近くも前にたった一度だけ私は自分の愛車を遺棄したことがあった。私は大学生で、冬の夜おそく家庭教師のアルバイト先から帰ってくる途^と中だった。毎晩々々そんな日がつづき、金もなく楽しい事もないので私はなんととはなしに捨てばちな気分におちいていた。私は真っ暗な中でわざと目をつぶったり両手をハンドルから放したり、寒さしのぎにただもう気がいのようにペダルをふんだりしてしっ走^はっていた。と、やにわに自分の身体が宙を五メートルぐらい、ふわあつと飛んだように思った。工事中の路上に置いてあった黒いドラム缶にまともにつっこんだのだった。放り出され

た私は不思議なことにかすり傷ひとつ負わなかったが、古い自転車はすっかりひしゃげてしまい、完全な円であるべき車輪が不等辺四角形のようになっているのが暗がりでも見分けられた。で、私はその自転車をその場に遺棄して、歩いて家へ帰った。よごれた下着をよその家にぬぎ捨ててきたようないやな気持がしなくてもなかったが、とにかくもう見る気がしなかった。いま思うと、あの時の私の自転車こそは百パーセント更生不能の「粗大ゴミ」の見本ともいうべきものだった。

ところで、昼間私が原っぱでみつけて確保したつもりでいた子供用の自転車がどうなったか？——それについて報告しておかなくてはならない。その晩私が夕食のテーブルでおもむろにその一件を打ち明けると、妻も子供たちも熱心な反応を示したのは言うまでもなかった。とりわけ上の二人の息子は、現在あてがわれているのよりも少しでもましな古自転車を欲しがっていたから、われ勝ちに現場へとかけつけることになった。しかし、私の一家五人が一団となって「粗大ゴミ」の山のふもとにと着した時には、目あての子供用自転車はもう無くなっていた。それどころか、昼間見かけた大人用の古物さえあらかた姿を消していた。

あんなものはだれも持って行くまいとタカをくくっていた私は軽率であった。おくれげながら私が気づいたことは——どうやら古自転車の回収にかけては私などをうわまわる常連がいるらしいということだった。それはなんともこそばゆいような光景だった。そこにはすでに何組かの——私に似た——親子づれがいたのである。小さな女の子をつれた若い母親もいた。彼らははじめから手ぶらでやってきたのか、それとも何か廃品を出しにきたついでにほり出し物をあさっているのか、闇の中でゴミの山をつきくずしては懐中電灯でそこを照らしていた。それにしても、昼間は人気のないこの原っぱが夜になるとともににぎわいだすというのもゆ쾌な話であった。

あの子供用自転車もきつと彼らのしわざだった。彼らはおそらくこの私以上に子供に新品の自転車を買いあ

問十四

える余ゆうのない父親や母親にちがいはなかった。私はそんな親子のいる家庭をひどくつかしいもののように想像して、安どの微笑を禁じ得なかった。このあたりにはふところの暖かい連中ばかりが住んでいるかのように思いこんでいた私は、まちがっていたようだ。こと自転車に関しては世の中はうまく出来ている。おしげもなく捨てる人もいれば待ちかまえていて捨てる人もいる。ただ捨てる人間は白昼堂々とやってくるのに、拾うほうは夜陰に乗り人目をぬすんでひそかにやってくるといううちがいがいるのだった。結局町の古自転車の台数はプラスマイナス・ゼロというよりはかなり不足気味で、い然として自転車業者を利する結果になっているのだろう。それにまた彼らだって、銀ペンキをぬって若干手直しを加えるだけで何千円にもなるこの「粗大ゴミ」を見のすはずはなかった。

先着の一家の中に同年ばいの競争者をみつけたために、私の子供たちはひどくし激されたと見えて、負けじとばかりに廃品の山をくずしにかかっていた。『おい兄貴！来てみる！こんなものがあるぜ！』『よし、いま行くからな！ちょっと待ってろ！』——兄と弟とが闇の中でたたましく呼び交わしているその有様は、まるで宝の山でも探しあてたかと思うようだった。自転車さがしのつもりでやってきたのが、いまや当初の目的は見失われて物欲をむきだしにしたゴミあさがりが展開されていた。暗いからいいようなものの、私はさすがにはじで

問十五A

顔が赤くなるのを覚えてしきりに彼らをしかりつけた。『やめろ！きたならしいことは！』だがだれも耳をかく者はいなかった。彼らの母親までもが、いったい何を探し出そうというのか、いく重にも積み重ねてある家具の山に足をかけてガラガラと引きくずしていた。私はなおも家族にむかってさけぶのをやめなかった。『やめろ！

問十五B

いい加減に！そんなガラクタ、いくら欲ばって持って帰ったって使えやしないのだ！使えないからこそ捨ててあるのだ！こじきみたいなまねはよせ！よせ！』そんなふう口走る言葉は、私が日ごろひれきしている見解とも現に今夜こうしてここにやって来ているその行ないとも明らかにむじゅんしているのだったが、とにかく

く私は彼らを引きあげさせるのにやっきになっていた。そしてそのくせ問題の子供用自転車については、もう二、三日待てばまた同様な品物が出るかもしれないなどと考えているのだった。

後刻、一家五人が明かりの下に集合してみると、五人のうち三人までは大なり小なりいかがわしい拾得物をたずさえてきていることがわかった。あさましいゴミあさりに加わらなかったと言えるのは、かろうじて三歳の子供だけだった。^{問十六}彼は最初から他のどんな品物にも目をくれずに、道ばたにころがっていたヤシの実——それも虫

の食った古いかざりもののヤシの実を一個、ラグビーのボールのようにしっかりとこわきにかかえていた。

(阿部昭「自転車」)

〈注1〉ぬすみやさぎなどの犯罪行為によって不法に手に入れた品物

〈注2〉すわるときやねるときに下に敷くもの

〈注3〉生まれて間もない赤んぼう

〈注4〉あわれなようす。ひさんなさま

〈注5〉気が小さくてびくびくしているさま

〈注6〉財産などを使い果たすこと

〈注7〉大便と小便

〈注8〉心の中をかくさず打ち明けること

問一 部a・bの言葉の文章中の意味としてふさわしいものをそれぞれ選びなさい。

a 憂き目を見る

1 相手にされなくなる

2 悲しい経験をする

3 いやな気持になる

4 意外な体験をする

b 目星をつける

1 見こみを立てる

2 目標を立てる

3 計画を立てる

4 対策を立てる

問二 部ア・イと同じ意味で用いられているものをそれぞれ選びなさい。

ア 身につまされる

1 思いがけない良い知らせを聞き、身につまされて言葉が出なかった

2 これまでの努力がすべてむだになって、身につまされてしまった

3 セミが成虫になるのを最後まで見届け、身につまされる感動を覚えた

4 いたましい事件をニュースで知って、身につまされる思いがした

イ タカをくくる

1 A君は、勉強しなくてもテストで満点を取れるだろうとタカをくくっていた

2 B君は、楽しみにしていた行事が中止になるかもしれないとタカをくくっていた

3 C君は、今日こそはたん生日のプレゼントが届くはずだとタカをくくっていた

4 D君は、宝くじの一等が万が一当たったら何を買おうかとタカをくくっていた

問三 後の問に答えなさい。

①「私」の家族は、「私」をふくめて何人家族ですか。

②いつの時代の話ですか。元号を漢字二字で書きなさい。

問四 — 部「その方法」とありますが、具体的にどのような方法ですか。二十字以内で書きなさい。

問五 — 部「いわゆる人間らしい文化生活」とは、どのような生活のことを言うのですか。

- 1 仕事であくせくするよりも家庭での団らんを大切にする温かみのある生活
- 2 宗教的な敬けんさや道徳的な正しさに価値を置く精神的に深みのある生活
- 3 物質的な豊かさを追求したり便利さや機能性を重視したりする快適な生活
- 4 どんなものでも最新のものやごうかなものばかりを買いうぜいたくな生活

問六 — 部「そのグロテスクさ」とは、どのようなことに対して言っているのですか。

- 1 少しでも古びたものは捨ててはばからないという派手ではなやかな生活へのあこがれがうきぼりになっていること
- 2 文化生活における必じゅ品と言われる多くのものが実生活においては必ずしも必要不可欠ではないという事実があらわになっていること
- 3 必要なら作り不要になれば容しゃなく捨てるという人間の心の自己中心的なきたならしい部分がむき出しになっていること
- 4 電化製品から装しょく品までありとあらゆるものを分別することなく投棄してしまう地域住民のマナーの悪さが明るみになっていること

問七 — 部「私は足元にころがっている銀ピカの真新しそうなトースターをさもばかにしたようにくつのつま先でけったりした。また、ほこりをかぶってはいるが最新型とおぼしいミシンやトランジスタ・ラジオ

- 1 十分に使える新品同様のものをあとでこっそり拾いにくるために、他の人に先に見つけられないようにかくそうとしている
- 2 ゴミとして捨てられる新品などという自分の理解をこえたものを消し去ることで、混乱した気持ちを落ち着かせようとしている
- 3 ふだんから物を大事にあつかっている自分としては捨てられた新品を息子に見せたくないで、体よく片づけようとしている
- 4 他人が自分の持ち物より立派なものを捨てるのがしゃくにさわりながらも、わざとゴミへの関心がないうふりをしようとしている

問八 — 部「A」に入るふさわしいものを選びなさい。

- 1 まじまじと
- 2 さりげなく
- 3 あからさまに
- 4 やみくもに

問九

「」部における「私」の説明としてふさわしいものに○、そうでないものに×を書きなさい。

- 1 いくらでも自転車が入るので自転車屋という商売に対する不信感が強まっている
- 2 冬なのにへびをこわがる息子が情けなく、いらだっている
- 3 意気ようようと捨てられた自転車を拾いに行ったのに、まだ世間体を気にしている
- 4 見つけた自転車をすでに自分のものにしたような気持でいる
- 5 へびのおかげで子供が危険なゴミの山に入ろうとせず、ほっとしている
- 6 ゴミの山をくまなく探して手ごろな子供用の自転車を見つけようとしている

問十

部「私はこの子にも当分の間はあの自転車で練習させて、じょうずになったら新しいのを買ってやればいいと言いつがましく考えていた」とありますが、どのようなことに対する「言いつ」なのでしょうか。本文中の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。

問十一

「あの映画の自転車」(――部A)、「今日私がうるさくせがまれているような子供の自転車」(――部B)の説明としてふさわしいものをそれぞれ選びなさい。

- 1 親子の思い出がたくさんあった思い入れの強いもの
- 2 機能や装しよく品を備えた娯楽や道楽のためのもの
- 3 近所の自転車屋ではめったに売っていない希少価値があるもの
- 4 いつでも廃品の山からほり出すことのできる不要なもの
- 5 家族を養っていくのになくはならないもの
- 6 父子のきずなを決定的に引きさくいまわしいもの

問十二

に入るふさわしいものを選びなさい。

- 1 どんなことをしてでも必死に子供らを食べせるといふ真けんさ
- 2 物を大切に使うことを子供らにしっかり教えこもうとするきまじめさ
- 3 子供らにはじをかかせまいと自分をぎせいにしてまで働くやさしさ
- 4 子供らにはげいたくをさせず拾ってきたものがまんさせるつつましさ

問十三

部「それはなんともこそばゆいような光景だった」と「私」が思ったのはなぜですか。

- 1 ゴミの中から自転車を拾うという自分のアイデアが、だれもがやっている平ぼんなことに過ぎないと気づかされたから
- 2 自転車很简单に手に入ると期待していた子供たちに、世の中はあまくないという現実を教えることができたから
- 3 ゴミあさを先にやっている親子づれの姿に、まさに自分たちがこれからやろうとしていることを見てしまったから
- 4 競争者がいることにも気づかず、得意げに家族をつれて粗大ゴミの山をあさにきた自分のおろかさを思い知らされたから

問十四

——部「私はそんな親子のいる家庭をひどくつかしいもののように想像して、安どの微笑を禁じ得なかった」とありますが、このときの「私」の気持の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 つつましくも仲良く物を拾う親子を見て、自分もあのようになごやかな家族でありたいというらやましさを感じている

- 2 原っぱに物を拾いに来る人々の姿を見て、自分の子供時代と同様に使える物は拾って使うのが当然だと改めて確信している

- 3 人目をしのいで物を拾う人々の姿に戦後の物のない時代が思い出されたが、現代はもうそこまで悲さんではないのだと気を取り直している

- 4 この町にも捨てられた物を利用して生活している人々がいるのだと、自身の生まれ育ったかん境が思い合わされ親近感を覚えていく

問十五

「暗いからいいようなものの、『やめろ！ きたならしいことは！』」（——部A）「私はなおも家族にむかってさけぶのをやめなかった。』とにかく私は彼らを引きあげさせるのにやっきになっていた」

（——部B）とありますが、このときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 粗大ゴミへの関心をそれなりにおさえてきたのに、自分の心のおくにあるさもし根性（じょう）が家族のあさましいゴミあさりによって思いがけなくあらわになった気がしてたえられないでいる

- 2 ゴミあしりは自分が提案したことではあったが、いざ実際に家族一丸となってやってみたところいくら探してもろくなもの一つ見つからず、落たんのあまりやけを起こしている

- 3 家族がむちゅうでゴミあしりに興じ欲望をむき出しにする光景にあっけにとられ、いつもの平穏（おん）な家族の姿とはあまりにかけはなれた様子をおそろしく思っている

- 4 ゴミあしりに熱中するあまり家族のだれもが父親である自分の言葉に耳を貸さないことに腹を立て、何としてでも家長としての権いを取りもどそうとあせっている

問十六

——部「彼は最初から他のどんな品物にも目をくれずに、道ばたにころがっていたヤシの実——それも虫の食った古いかざりもののヤシの実を一個、ラグビーのボールのようにしっかりとこわきにかかえていた」とありますが、「私」は「三歳の子供」がかかえている「ヤシの実」をどのようなものとして見ていますか。

- 1 家族の拾得物の中でいちばんすぐれていると本人が思っているもの

- 2 虫に食われた粗末なものでも小さい子供が遊ぶのにちょうどよいもの

- 3 この土地では子供がめったに見ることがないようなめずらしいもの

- 4 金銭的価値とはまったく関係なく本人が純粋に気に入ったもの

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

あなたは、だれかと対話をした経験があるだろうか。会話ではなく、対話である。

よほど特別の事情がない限り、私たちは日常的に会話をしている。駅のキヨスクでチョコレートバーを買い、会社の守衛さんにあいさつし、職場で同僚とうと打ち合わせをして、昼食時にショートメールで遠方の友人と近きょうを伝えあい、帰宅して家族と今日のニュースについて話し合う。このどの場面でも、私たちは会話をしている。そのいくつかは軽いやり取りであったり、ただ楽しむためであったりする。他方、仕事の打ち合わせなどはかなり真けんに、ときに厳しいやり合いをしなければならない。

だが、このどれもが会話であっても対話ではない。

対話とは、真理を求める会話である。対話とは、何かの問いに答えようとして、あるいは、自分の考えが正しいのかどうかを知ろうとして、だれかと話し合い、真理を探究する会話のことである。ただ情報を検さくすれば得られる単純な事実ではなく、きちんと検討しなければ得られない真理を得たいときに、人は対話をする。それは、自分を変えようとしている人が取り組むコミュニケーションである。

ショッピングや仕事でのやり取りは、自分の要望と相手の要望をすり合わせようとする交しである。友人や恋人との会話は、よい関係を保ち、相手を理解し、たがいに話を楽しもうとする交流である。これらの会話は有意義かもしれないが、真理の追求を目的としてはいいない。対話は、何かの真理を得ようとしてたがいに意見や思考を検討し合うことである。

私たちは日常生活の中で、ほとんど対話する機会がないのではないだろうか。それは、真理の追求が日常生活で行われなくなっているからである。だが実は、対話をしなければならない場面は、日常生活の中にも、思ったよりもたくさんあるのだ。

仕事場でも、ただ当面のあたえられた業務をこなすだけではなく、仕事全体の方向性や意味が問われる場合、たとえば、「良い製品とは何か」「今はどういう時代で、どのような価値を消費者は求めているのか」「かん境問題に対して、わが社はほかかむりをしていいのか」など真げんに論じるべきテーマは少なくないだろう。家庭でも、子どもの教育をめぐる、そもそも子どもにとっての良い人生とはなにか、そのために何を学んでほしいのか、親と子どもとはどういう関係なのか、子ばなれするとはどういうことか、これらのことについて家族で話し合う必要はないだろうか。地域でも、どのような地域を目指せばいいのか、住人はどのような価値を重んじているのか、以前からの住人と新しく来た人たちはどう交流すればいいか。本当はこうしたことについてひざを

つき合わせて対話する必要があるのではないだろうか。

(河野哲也『人は語り続けるとき、考えていない 対話と思考の哲学』)

問一 この文章の内容を八十字以内で要約しなさい。

問二 次の中から、この文章で筆者が言っている「対話」にあたるものを二つ選びなさい。

- 1 今年の夏休みの旅行にどのような服を持って行くかを家族で話し合った
- 2 感染症を根絶するためにどのような政策をとるべきかを政府内で議論した
- 3 地域の清掃をどのような順番でわりふってゆくかを町内会で討論した
- 4 新商品を店のたなにどのように並べればよく売れるかをチームで検討した
- 5 目的地に最も早く着くにはどの電車に乗ればよいかを駅員さんと相談した
- 6 八百屋の店先でトマトがもう少し安くならないかと店主と交しようした
- 7 より良いクラスを作るにはどうすればよいかを学級会で意見交かんした
- 8 久しぶりに故郷から出てくる友だちと食事の場所の打ち合わせをした

問三 あなたがだれかと会話ではなく対話したいと思う関心事と、その関心事についてのあなたの意見を二百字以内で書きなさい。

【三】「せめて」「きっと」という言葉を両方用いて三十字以内の文を一つ作りなさい。

〔四〕 次の――部1～5のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また――部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

キョクセツの多い山道 城をキズく 家庭サイエン 身のチヂむ思い

胸をハる 一糸乱れず行進する ラストシーンが圧巻だ 歌集を編む

（問題は以上です。）

＊問題文に使用した作品における難しい漢字表記は、現在一ぱんに使われている漢字またはひらがなに改めるか読みがなをほどこすかしてあります。また、送りがなを加えたりけずったりしたものもあります。なお、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現については、原文の歴史性と文学性とかんがみ、そのままとしました。

ここは余白です。

